

キリストの十字架は、キリストを信じた者を天国に入れてくださる、教会はこれまでそう説いてきた。しかし、それだけでは不十分である。「神のかたち」に造られた人間は被造物の管理を神から託されたが、墮落によってそれを傷つけてしまった。その管理権を回復されたのがキリストの死であると、ヘブル人への手紙 2 章は伝えている。本資料は、2011 年夏の大野キリスト教会の教育セミナーの講演原稿に修正加筆したものである(2013 年 11 月)

福音は被造物管理権の回復を含むのか

ヘブル人への手紙 2 章を正しく読み、新しい福音理解を提唱する

ごあいさつ

今年の教育セミナーにお招きをいただき、嬉しく思っております。

今から 3 か月前、2011 年 3 月 11 日、私たちは 1000 年に一度とも言われるほどの大きな地震を体験しました。そのような中で私は、30 年前に自分に示されたヘブル人への手紙 2 章のメッセージを語るようにという、神からの促しを受けていました。それは、私の信仰生活にパラダイムシフトを起こさせた衝撃的なメッセージです。そのメッセージを本日のセミナーに集っている皆さんにお分かちしたいと思っております。

聖書の中には、キリスト者の歩みを大きく変えてきた聖句がたくさんあります。しかし、今日お話するヘブル人への手紙 2 章を、そのような個所としてあげるキリスト者はいないでしょう。しかしこの聖書箇所には、世界中の教会とキリスト者の今後の歩みを一変させてしまうほどの大きなインパクトが隠されています。これから、そのことを明らかにします。ぜひ大きな期待をもってお聞きいただきたいと思います。

1. ヘブル人への手紙 2 章のメッセージは見落とされている

ところが、これは不思議なことです。このヘブル人への手紙 2 章のメッセージを正しく受け止めているキリスト者はいません。世界中どこを探しても見つからないでしょう。キリスト者は昔から、信仰にとって重要なことがらを「信仰告白」とか「教理問答」、「信条集」を学びながら自分の信仰を築きあげてきました。古代の教会には、「使徒信条」とか「ニカイア信条」、「アタナシウス信条」、「カルケドン信条」などという信仰告白がありました。近代から現代にかけても「アウグスブルグ信仰告白」、「ウェストミンスター信仰告白」、「ウェストミンスター大教理問答」、「小教理問答」など、たくさんのすばらしい信条集があります。ところが、どのような信仰告白を見ても、「人間の被造物の管理権の回復」などという教えは出てきません。ヘブル人への手紙 2 章に注目した痕跡は全くありません。

信条集だけではありません。キリスト教出版物の中には、十字架の奥義を解説している書物がたくさんあります。信徒の皆さんの信仰生活に役立つようにと書かれた霊的な読み物であっても、牧師たちが読む学術的な書物であっても、この問題にふれているものはありません。贖われたキリスト者に対して被造物管理権が回復されたなどという話は、組織神学や教義学などの書物においても、そして驚くべきことに、ヘブル人への手紙の註解書や説教集においてできえ、出てくることはありません。

そのようなわけですから、教会がこのヘブル人への手紙のメッセージを正しく受け止めてこなかったのは、当然と言えば当然でした。その結果、現在のクリスチャン像はとていびつなものになっています。それは、「天国行きの切符を片手に、何もすることがなく、ただ目的地のパンフレットを眺めながら、天国行きの待合室でぶらついている」、そんなところではないでしょうか。中には、出発までまだ時間がありそうだと思い、待合室から出て、駅の周囲の人々に、「天国行きの汽車が間もなく出発しますよ。さあ早く待合室にいらっしゃい」と熱心に誘っている人もいます。また、もう待ちくたびれて、待合室を出てかなり遠くまで放浪し、天国行きにだんだん興味を失いかけている、そんなクリスチャンたちもいるようです。

福音派の教会では、「四つの法則」という小冊子が求道者を導くためによく使われてきました。また、「字のない絵本」などが、子どもたちに救いを説明するために用いられてきました。そういう教材は、もしクリスチャンになったら、後は天国行きしか残っていません、そんな風に言っているようにも思えます。教会では、よきキリスト者とは礼拝を忠実に守る人、十分の一献金をする人、教会活動とその維持のために熱心に奉仕する人、一生懸命伝道

(証)する人、毎日のデボーションを守る人、そんな考えが蔓延しているのではないのでしょうか。それらは皆、すばらしく、大切なものです。しかし、そういう内向きの話だけでよいのでしょうか。

もう30年近くも前の話になります。私は聖契神学校で一度だけヘブル人への手紙のクラスを担当したことがあります。その2章6-18節の講義をしていたとき、まさに「目からうろこ」という経験をしました。「キリストの贖いは、人間の被造物に対する管理権を回復した」ことを示されたのです。それまでの私は、「キリストの贖い」をそのように考えたことはありませんでした。そう教えられたこともなければ、読んだこともない。むしろそんな風に教えたこともありませんでした。大げさな言い方ですが、私の信仰にとってそれは、「コペルニクスの転回」となりました。

その時以来、私のキリスト教信仰とキリスト者に対するイメージは大きく変わりました。自分の歩みに変化が起こり始めたのです。それまでの私には、この世界で起こるほとんどのことは意味のないことでした。ところが、この世の文化、学問、芸術、仕事、社会や国家、経済や政治、宇宙や自然界、いろいろな宗教が果たしてきた歴史的な役割、そのような一つ一つのことが、とても大切なことだと気づき始めました。

そうすると、牧師として教会の方々を見る目が変わってきました。教会に対しての理解も一変しました。自分が所属する日本バプテスト教会連合という教派の中で、相模原の牧師会において、日本福音同盟や福音主義神学会などにおいて、さらにはエキュメニズム運動に対して、自分の立ち位置と果たすべき責任が見えてきました。

2. ヘブル人への手紙 2章 6-13 節を理解する

では、聖書のヘブル人への手紙 2章 6 節から 13 節をお開きください。この聖書の本文をゆっくり、一語一語かみしめながら、著者が言いたい意図を考えつつ一緒に読んでみましょう。

むしろ、ある個所で、ある人がこうあかししています。

「人間が何者だというので、これをみこころに留められるでしょう。

人の子が何者だというので、これを顧みられるでしょう。

あなたは、彼を、御使いよりも、しばらくの間、低いものとし、彼に栄光と誉れの冠を与え、万物をその足の下に従わせられました。」

万物を彼に従わせたとき、神は、彼に従わないものを何一つ残されなかったのです。それなのに、今でもなお、私たちはすべてのものが人間に従わせられているのを見てはいません。

ただ、御使いよりも、しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見えています。

イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。

神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであったのです。

聖とする方も、聖とされる者たちも、すべて元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。

「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」

またさらに、「わたしは彼に信頼する。」

またさらに、「見よ、わたしと、神がわたしに賜った子たちは。」と言われます。(ヘブル 2:6-13)

この箇所ではヘブル人への手紙の著者は、一つ一つのステップを踏みながら極めて論理的に話を展開しています。それでは、この箇所の流れを追いかけてながら、ざっとその内容を把握してみましょう。

著者はまず、人間とは何者なのかと問いかけている詩篇 8 篇を引用します(6 節)。その詩篇では、人間が他の被造物を支配する存在として造られたことが告白されています(7 節)。

ところが著者は、現実には生きている人間は今なお万物を支配していない、という事実を指摘します(8 節)。しかし著者はそこにとどまらないで、人となられたイエスだけは別だと宣言します(9 節)。人間となられたイエスは、死と復活を通して、万物の支配者となられたと続けます(9 節)。

著者はさらに、イエスの死はそれだけではなく、人間に「すべての被造物の支配権」を回復させたと解説します(10 節)。そして、そのことのゆえにキリスト者がイエスの兄弟になり、神の子になったことを、旧約聖書を引用しな

がら明らかにします(10-13 節)

この箇所は一つのまとまりをもっており、著者が言いたい意図は明確です。皆様も、同じように読むことができたでしょうか。

聖書のテキストの歴史的背景を解説したり、テキストの流れに沿って一つ一つの語句の意味を明らかにする書を註解書と言います。ヘブル人への手紙に関してたくさんの註解書が出版されています。では、その註解書はこの箇所をどのように読んでいるのでしょうか。

どの註解書であっても、それが註解書である限り、「キリストが十字架の死を通して被造物の支配者になったこと」についてはきちんと読み取っています。確かに、被造物に対するキリストの主権性は、死と復活によって確立されました。このことはとても重要なことで、すべてのキリスト者と教会が受け入れ、告白してきました。問題は、このヘブル人への手紙の 2 章を読みながら、そこに留まってしまっていることにあります。どうして、「キリストの死が、救いを受けたキリスト者に被造物の管理権を回復する」というメッセージにまで至らなかったのでしょうか。

これは、とてもおかしなことです。もしキリストの主権性だけの話であれば、十字架は必要ありません。もともとキリストは、全被造物の創造者であり、支配者であり、相続者でした(ヨハネ 1:1-3、コロサイ 1:15-17)。従って、全被造物の主権を確立するのに、受肉、十字架及び復活は必要のないことでした。人間の管理権の回復のために、受肉、十字架、復活が必要だったのです。

それに、7-8 節において、ヘブル人への手紙の著者がわざわざ詩篇 8 篇を引用していることを忘れないください。詩篇 8 篇は、人間が創造時に与えられた「被造物の支配権」を謳ったものです。決して、人となられたキリストに関して謳われたものではありません。受肉されたキリストについて言及されるのは、9 節が始めてです。しかもその 9 節においてさえ、キリストは人間とは明確に区別されて、論じられています。

さらに 10-11 節では、キリストがなされた一連のみわざは、神にとってふさわしいことだと確認されています。一連のみわざとは、言うまでもなく、キリストの死は、失われた被造物の管理権を人間に回復したということです。キリストの支配権の確立という話だけであれば、10 節から 11 節の文章は意味を成しません。

加えて、12-13 節においてわざわざ旧約聖書が引用され、キリスト者が「キリストとの兄弟である」こと、あるいはキリスト者が「神の子である」ことが強調されています。ここでなぜ、キリスト者とキリスト(あるいは神)とが一つの家族であると強調されなければならなかったのでしょうか。全被造物がキリスト者の管理下に置かれたことを確認するために他なりません。

というわけで、この箇所からキリストの主権性を読み取るだけでは、ヘブル人への手紙の著者が言いたかったことを全く理解していないことになります。キリストがキリスト者にどれほどすばらしい恵み(被造物管理の特権)を与えてくださったのか読み取れないのは、聖書読みの聖書知らずということになります。私には、すべての註解書や神学書が、この箇所をキリスト論に留め、贖罪論、人間論、被造物論、神の国論に発展させないことをどうしても理解できません。

このことは、どうでもよい小さなことだと思わないでいただきたいのです。牧師や聖書学者、神学者がこの大切なメッセージをきちんと読み取らなければ、教会は致命的なダメージを受けます。キリスト者は貧しい福音理解しかもてず、いびつな信仰生活を余儀なくされてしまいます。「ケープタウン決意表明」は、「包括的福音」を提示したと意気込んでいますが、「キリスト者の社会的責任」止まりで、「キリスト者の被造物管理権」にまでは及んでいません。それではまだ、「欠陥福音」の域を出ていません。

3. 註解者たちはなぜ著者の真意を読み取れなかったのか

ヘブル人への手紙の註解書は、たくさん世に出ています。私が調べただけでも、百冊ぐらいにはなります。その中には、一流の註解者として世界中に知られている学者たちによる書物もあります。それではなぜ彼らが、ヘブル人への手紙のこのテキストのメッセージをきちんと読み取れないのでしょうか。

原因は三つあるように思います。

一つは、ヘブル語旧約聖書とパウロがここで引用している七十人訳ギリシャ語旧約聖書との間に違いがあり、詩篇 8 篇の解釈に混乱が生じていることです。二つ目は、ヘブル 2 章 5-18 節が本来一つのまとまりをもっている

ことは明らかなのに、9節と10節の間で区切る伝統がいつの間にかでき上ってしまったからです。そして三番目は、「キリスト者の被造物管理」という考えは、これまで教会やキリスト者の中で語られたことはなく、そういう視点からこの箇所を読む可能性などは、全くなかったからです。

それでは、註解書に見られる混乱の中身を、もう少し具体的に検証してみましょう。この講演は教育セミナーですので、少々学術的なプレゼンテーションをしても、お許しいただけます。少々細かな議論になり、学者の名前なども出てきますが、難しい話をするわけではありません。頑張ってついてきていただきたいと思います。

まず、5節の「私たちが今話している後の世」とは、「この終わりの時」(ヘブル 1:2)とか、「後にやがて来る世」(ヘブル 6:5)と同じ世界のことで、それは、「キリストの復活に始まり再臨の時までの、現在の世界」を指しています(安田、ブッハナン、宇田、ドッド、ブルース、モリス、アートリッジ、ステッドマンなど)。これは、イエスの言われた「神の国」のことであり、今のこの恵みの時代を指しています。ところが、註解者の中には、現在既にこの世界に存在している「神の国」というより、「未来のこと」(レンスキー、エリワース)、「キリストにある新しい秩序」(ロバートソン)、「再臨以降の未来の世界」(名尾、シュラッター、カーター、尾山)、「終末時のメシヤ到来後に現れる新しい世界秩序」(川村)、「未来の神の支配される時」(コスター)、「千年王国」(山岸、ヘディング)など、未来の出来事と解釈する註解者が少なくありません。もし未来のことと考えますと、今の世界における被造物の管理権という問題が遠い将来の事柄になってしまい、今のキリスト者には関係のないことになります。

次に、詩篇8篇に出てくる「人の子」(6節)と「彼」(7節に2回出てくる)については、ヘブル詩の平行法より「人間」を指すことは明らかです(バークレー、モリス、他)。ところが学者の中には、七十人訳ギリシャ語聖書を持ち出して、「キリスト」と解釈する人(レンスキー、山岸、ブッハナン、宇田、ブルース、ロング、コスター、レイリング)や、「キリストと人間」の両方を含めて解釈する人(ヘディング、エリワース、尾山)がいます。これでは、詩篇の作者が述べている「創造時の人間に本来与えられていた被造物の管理権」という点があいまいにされ、この箇所全体で言おうとすることが不鮮明になってしまいます。確かに福音書を読むと、イエスのご自分のことを「人の子」と言われました。また、このヘブル人への手紙2章でも、最終的には受肉されたイエスの話になりますので、キリストと解釈したくなるのは分からないでもありません。しかし詩篇8篇では「人間」を指すことは明らかです。ヘブル人への手紙の著者も、その理解に基づいて論理を展開していることも、疑問の余地はありません。

第三に、8節に二度出てくる「彼」は、続く「私たちはすべてのものが人間に従わせられているのを見てはいません」という文章から、「人間」を指しています。ところが、ある註解者たちは、「キリスト」と解釈し(新共同訳も「この方」と訳しており、そう読めます)、混乱を招いています。ヘブル人への手紙の著者の緻密な論理によれば、9節まではキリストのことではなく、人間についての言及です(モリス、アートリッジ)。著者の論理を丁寧に追いかけて読みないと、この箇所著者が主張しようとしている事柄が分からなくなってしまいます。というより、きっと反対なのでしょう。註解者たちは、ヘブル人への手紙の著者の意図がよくつかめなため、8節までにもキリストのことを読み込み、読者に理解させようとしたのでしょう。実は、それがそもそもの間違いのもとなのです。分かりやすくさせようとした結果おかしな方向に行ってしまうことは、時々起るものです。

四番目に、9節の「栄光と誉の冠」は、7節の「栄光と誉の冠」と全く同じ表現です。そしてそれが、創造時に与えられた人間の被造物管理権を指していることは、詩篇8篇の内容から明らかです。ところが註解者の中には、9節の「栄光と誉の冠」を7節のそれとは切り離し、「変貌されたキリストのお姿」(Ⅱペテロ 1:17)とか、復活のキリストが「すべての名にまさる名を与えられた」こと(ピリピ 2:9)とか(ブルース、エリワースなど)、「大祭司としての栄光」(シュトラートマン)などと解釈する人々がいます。このように解釈すると、著者の意図から大きくずれてしまうのは当然です。

五番目に、9節から10節は内容的にスムーズに続いています(エリワース、NIV、新共同訳など参照)。従って、9節と10節の間で区分する理由は全くありません。ところが、ほとんどの註解者は、5-9節と10-18節とを分けて註解しています。その結果、10節の「栄光」は、本来7節及び9節の「栄光と誉れ」を受け、「人間の被造物管理権」を指すはずなのに、全く別の内容を読み込んでしまいます。例えば、「和解」(ブルース)、「人間社会の問題」(松山)、「苦しみや死に打ち勝つ栄光」(加藤)、「人々を最終的に完全な救いに導く」(プディ)、「ヘブル1:3-4に見られる御子としての栄光」(エリワース、レイリング)など、いろいろ提唱されています。このような解釈は、文脈に沿って忠実にテキストを解釈しない典型的な例といえましょう。

六番目に、11 節の「聖とする」及び「聖とされる」という言葉を、「神のために選び別つ」という、言葉本来の意味（エリンワース）に理解するなら、人間がキリストの贖いを通して、再び被造物を管理するよう招かれている（聖別されている）と読むことができます。文脈から言えば、そう読むことが自然です。ところがほとんどの註解者は、この「聖別する」という言葉を「清くする」という意味に解釈し、「キリスト者の聖化」の意味を読み取ります（安田、松山、蓮見、シュラッター、ブルース、プディ、ロバートソン、カーターなど）。もしそう読みたいのであれば、ヘブル人への手紙の著者がなぜ「キリスト者の聖化」の問題をここで持ち出す必要があったのか、きちんと説明せねばなりません。それをせず、いきなり「キリスト者の聖化」をもち出すのでは、いかにも唐突過ぎます。人間の被造物管理が回復され、キリスト者はそのために選び別たれた者たちであると読むなら、実にスムーズに論理が展開されることになります。ここでも、註解者たちは、人間の被造物管理権の回復などというメッセージを思いつかなかったので「聖化の問題」を持ち込まざるを得なかったというのが、本音でしょう。

七番目に、11 節及び 12 節においては、キリストの死によって贖われた人々は「キリストの兄弟」と、13 節においては「神の子」と呼ばれています。これらの表現はキリストとキリスト者との一体性を指しています。14-16 節はさらにこの事実を深く展開しています（ステッドマン、レイリング）。キリスト者がキリストの支配権を共有できるのは、キリスト者が「キリストの兄弟」であり「神の子」だからです。それは、ローマ 8:17 の「神の相続人であり、キリストとの共同相続人」と関連があります（レンスキー）。ところが、ほとんどの註解者は、このようなヘブル人への手紙の著者の論理展開を無視します。そして、イエスが福音書の中で語られた「兄弟」（マタイ 12:49、28:10 など）というニュアンス（そこでは、一般の家族関係を表わす言葉で、「相続人」という意識は含まれていません）か、本書の著者が読者に語りかけている「兄弟」という表現（3:1、12、8:11 など）と同一視しています（ブッハナン、コスター）。このように「兄弟」とか「子」という言葉を一般化して解釈すると、この箇所著者の論点は完全に無視されてしまいます。

いかがでしょうか。以上の説明で、ヘブル人への手紙の註解者たちが、ヘブル人への手紙の著者の論点を理解せず、それぞれ勝手な方向で解釈していることがお分かりいただけたでしょうか。通常、聖書註解者たちはその道のプロなので、信頼してよいものです。しかし、揃いも揃ってこうも皆がバラバラに解釈するようでは、専門家が信頼されなくなっても仕方がないと思います。

4. 人間創造の記録からヘブル 2 章 6-7 節を検証する

これまで、ヘブル人への手紙 2 章が「キリストの贖いは、人間の被造物の管理権を回復した」というメッセージを伝えていることを確認してきました。このメッセージは、言うまでもなく、聖書全体を貫いているはずですが、もしそうでないなら、それは異端的なものであり、受け入れるわけにはいきません。では次に、この被造物管理権の回復のストーリーを、聖書全体の流れの中において確認していきましょう。

まず、人間は創造時に被造物管理の使命が与えられたことを確認します。ヘブル人への手紙 2 章は詩篇 8 篇 6-8 節を引用しています。その詩篇には次のように歌われています。

あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。
すべて、羊も牛も、また、野の獣も、空の鳥、海の魚、海路を通うものも。

ここで「万物を彼（人）の足の下に置かれました」と言及されているのは、創世記 1 章 26-28 節の「人間の創造」の記録のことです。では、その箇所を読んでみましょう。

「そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

この創世記の人間創造の記録は、人間について二つのことを特別強調しています。一つは、人は「神のかたち」に創造されたこと、もう一つは、人が地球上に生きている被造物を支配しようと命じられていることです。

では、神が「われわれに似るように」と言われた「神のかたち」とは、具体的に何を指すのでしょうか。

三つの可能性があります。一つは、「知性、感情、意志」などの神がもっておられる人格性です。二つ目は、御子に対して神がもっておられる愛の関係です。そして三つ目は、被造物に対する神の支配権です。聖書学者たちは、この三つの可能性の中でどれがよいかを、長い間論争してきました。しかし、この三つは相互に関連しており、区別できません。従って、どれか一つに限定する必要はなく、三つともすべてを含めて考えてよいでしょう。つまり人は、神のみがもっておられる神のご性質を、その一部ではありますが、与えられているということです。このような被造物は他にはありませんでした。

「支配する」の原語は、他に「導く」とか(詩篇 68:27 など)、「指揮する」とか(Ⅰ列王 5:16、9:23、Ⅱ歴代 8:10)、「平和に、安心して住むことができるように支配する」などの意味があります(Ⅰ列王 4:24-25)。「統治」とか「支配」という訳語は、全体的な視野をもっていることを前提にした言葉です。それは、神にはふさわしいでしょう。しかし人は、ごくわずかな視野しかもてません。すると、上からの目線の「支配」ではなく、横からの目線の「管理」という言葉の方がふさわしいように思えます。

神は人に「地と地の上に造られた生き物」を管理するように命じました。ということは、被造世界は創造後も維持・管理される必要があったことを意味します。神はその創造の過程で、一つ一つを「よし」とされました(創世記 1:4、10、12、18、21、25、31)。といっても、その一つ一つが「不動の完成品」だったわけではありません。その後も生成発展を繰り返し、継続的に神の摂理の御手を必要としていました。ただ単に神だけでなく、驚くべきことに人間の管理をも期待されていたのです。

神はそのような人間をどうして造られたのでしょうか。そのような問いに対し、聖書は答えていません。従って、誰も答えることはできないでしょう。ただ私には、ヨハネの福音書 17 章にある「イエスの祈り」の中にそのヒントが隠されているように思えます。お家に帰られてから、ヨハネ 17:21-25 をじっくりお読みください。ここではただ、注目していただきたいことを述べておきます。

イエスとみ父は、創造以前から愛の交流をもっていた。その愛の関係をもっていた御父と御子は、その愛の関係をさらに広げようと望まれ、愛の関係を分かち合うことのできる人間を創造された。それゆえ、人は「神のかたち」に造られた。それによって、御父と御子が一つであるように、御父と御子とキリスト者が一つになることを願われた。その愛の交流は、被造物の共同統治によって実現される。これが、神とキリストが人間に被造物管理の権限を与えられた背景である(エペソ 1:3-5 をも参照)。

神が人間に被造物の共同管理能力を与えられたことは、アダムが動物に名前をつけたことによって証明されました(創世記 2:18-20)。アダムは造られてから間もなく、地を支配する最初の仕事として、与えられた洞察力、判断力、知力をフルに活用して、動物に命名しました。「名前をつける」という作業は、管理者にとって最初の仕事です。アダムは、動物の一つ一つの本質を見抜き、それぞれにふさわしい名前を瞬時につけていきました。

5. 人間墮落の記録からヘブル 2 章 8 節を検証する

次に、ヘブル 2 章 8 節は、「万物を彼に従わせたとき、神は、彼に従わないものを何一つ残されなかったのです。それなのに、今でもなお、私たちはすべてのものが人間に従わせられているのを見てはいません」と述べています。これは、創造時に人間に与えられた被造物の管理使命が何らかの理由でうまくいかなかったことを意味しています。異常事態発生、ということです。それは「人間の墮落」という事件で、創世記 2-3 章に記されています。

神はアダムに、「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」(創世記 2:16-17)と言われました。その後、どれほどの時間が経過したかははっきりしませんが、ある時サタンがやってきて、エバを誘惑し、禁じられた木の実を食べよう唆したのです。エバは誘惑に負け、神の戒めを破ってそれを食べてしまいました。さらに悪いことに夫にも与えたのでした。

そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。(創世記 3:6)

二人は、神の戒めに背いた結果、それぞれ罪の報いを受けました。エバは、出産という最も喜ばしい使命を、

苦痛が伴うものに変えられました。また夫とは愛し愛される対等の関係に造られたのですが、夫に支配されるという屈辱的な位置に立たされました。(創世記 3:16)

では、アダムの方はどうだったのでしょうか。まず、土地が呪われ、人間にとって害になる植物が生えてくることを告げられました。それだけではなく、アダムは、自分の食物を確保するのに苦しみが生じることになりました。

また、アダムに仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならぬ。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならぬ。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならぬ。(創世記 3:17-19)

土地が呪われた結果、「いばら」とか「あざみ」などが生えてきたことは、人間の墮落の結果が自然界にも及んだことを意味しています。「いばら」と「あざみ」のような植物は、人の墮落以前からあったことでしょう。しかし、アダムが耕すよう命じられたエデンの園には、墮落以前にはなかったのです。アダムの労働は、他の何ものにも煩わされず、楽しいものでした。それが、墮落事件によって一変してしまったのです。パウロは「被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています」(ローマ 8:20-22)と述べています。創世記 3 章の「いばら」と「あざみ」とは、「被造物が虚無に服した」ことの実例と見なしてよいでしょう。

この「いばら」と「あざみ」は、自然災害を考えるとときのヒントになります。津波や地震は、地球生成過程において絶えず起こり続けてきました。アダムとエバが罪を犯した結果、突然生じたわけではありません。もともと存在していたのですが、墮落後に人間が生活している舞台に現れてきた、ということです。人間に死が入ってきたこともまた同じです。神は最初の人間を永遠に生きる者として創造されました。このことが進化との関係でどのように考えたらよいのかは、別の機会にじっくり考えます。いずれにしても、永遠に生きる可能性を持っていた人間が、罪を犯した結果、死ぬべき存在と化してしまいました。

これは、創造時に与えられた人間の被造物管理権に破綻が生じたことを意味します。

6. イエスの贖いの出来事からへブル 2 章 9-10 節を検証する

三番目に、イエスが十字架の死によって人間の管理権を回復されたことを考えます。へブル人への手紙 2 章 9-10 節を読んでみましょう。

ただ、御使いよりも、しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見えています。イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであつたのです。

9 節の「栄光と誉」は 8 節と同じ表現で、「人間に与えられた被造物の管理権」を指します(10 節の「栄光」も同様です)。「御使いよりも、しばらくの間、低くされた方」とは、受肉してこの世界に人間として来られたイエスのことです。つまり、墮落によって破綻をきたした人間の被造物管理権が、受肉されたイエスの死によって回復されたというのです。多くの学者たちが主張するように、もしこの箇所がイエスの被造物に対する主権性を述べているに過ぎないとすれば、イエスの十字架上の死は必要なかったはずで、キリストは三位一体の御子なる神であり、その存在の初めから万物の創造者、支配者だったからです(ヨハネ 1:1-3、コロサイ 1:15-17)。

復活後、イエスは「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」(マタイ 28:18)と、弟子たちに宣言されました。それは受肉以前にイエスがもっておられた創造者としての支配権とは異なります。人となられたイエスが、十字架上で罪人そのものとして、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ(わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか)」(マタイ 27:46)と大声で叫ばれたゆえに受けた支配権です。つまり、人間が創造時に与えられていた本来の被造物管理権のことです。

このことは、次に続く「その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです」という言葉からも明かです。イエスの十字架上の死は、全人類のためでした。十字架には、いろいろな意味があります。罪の身

代わりの死(Ⅰコリント 15:5)、神と和解をもたらす死(コロサイ 1:22)、サタンや死を滅ぼした死(ヘブル 2:4)、自己犠牲の模範としての死(ピリピ 2:5)などです。しかしここでは、人間に被造物管理権を回復したという死です。しかもそれは、すべての人に与えられるべきものでした。何とすばらしいメッセージでしょう。

それゆえ 10 節は、キリストの贖いの死がキリスト者の「栄光(被造物管理権の回復のこと)」をもたらすことにふれ、「万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであった」と締めくくるのです。

7. キリスト者の特権的立場からヘブル 2 章 11-13 節を検証する

最後に、ヘブル人への手紙 2 章 11-13 節は、キリスト者が「キリストの兄弟」であると強調されています。

聖とする方も、聖とされる者たちも、すべて元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」またさらに、「わたしは彼に信頼する。」またさらに、「見よ、わたしと、神がわたしに賜った子たちは。」と言われます。

ここでは、キリスト者は「キリストの兄弟」(11-12 節)、あるいは「神の子」(13 節)であると述べられています。

ところでパウロは、イエスが多くのクリスチャンの中で「長子」であると述べています。「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」(ローマ 8:29)。ここで、義と認めた人に与えられた「栄光」とは、「御子のかたちと同じ姿」のことであり、それは 8:17 に出てくる「神の相続人」、あるいは「キリストとの共同相続人」のことです。ヘブル 12:23 では、「天に登録されている長子たちの教会」と言われています。キリスト者が「長子」であるとは、キリスト者が相続人だということです。それはキリストと共に被造物の管理をすることです。

この後のヘブル 2:15 では、キリスト者以前の人間の姿が「奴隷」として描写されています。その「奴隷」と本節の「子たち」とは、違いがあります。子どもには相続権があるのですが、奴隷にはありません。「相続権」とはむしろ、「神の相続人であり、キリストとの共同相続人」(ローマ 8:15-17)に属するものです。キリスト者が「神の子」とされたとは、「被造物の相続権を受けている者たち」ということです。

新約聖書は、贖われたキリスト者を「王」であり、「祭司」とであると述べています。(Ⅰペテロ 2:9、黙示録 1:6、5:9-10 など)。これは、驚くべき表現です。自分を「王」と見立てて信仰生活を送っているキリスト者はどれぐらいいるでしょうか。ほとんどのキリスト者は、パウロの「罪人のかしら」(Ⅰテモテ 1:15)という表現には親近感を覚えます。しかし「王」と言われると、違和感があるのではないのでしょうか。

「王」とは「支配権を持つ者」です。黙示録はキリスト者について、「彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった」(20:4)とか、「彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる」(20:6)、「彼らは永遠に王である」(22:5)などと述べています。前の二箇所は千年王国時代の、三番目は新天新地におけるキリスト者像です。贖われた民は、千年王国時代でも、新天新地の時代でも「王」なのです。キリスト者が王であることは、永遠に続くのです。

結論

これまで、ヘブル人への手紙 2 章のメッセージを正しく読み取る努力をしてきました。いかがでしょうか。「キリスト者は、墮落によって失われた被造物に対する管理権を、キリストの贖いの死を通して回復した」というメッセージを把握できたでしょうか。

もしそのように読むことができたなら、皆さんは、世界で最初に「キリストの贖いの中に、被造物の管理権の回復」を見出したキリスト者です。このメッセージは、どこにでも転がっている、あってもなくてもどうでもよいメッセージではありません。これまで誰も考えたことのない、教会や世界を根底からひっくり返してしまうようなメッセージです。

このメッセージを理解できたキリスト者は、二つの重大な使命を課せられています。一つは、この使命に生きることです。日々真剣に、神と共に、キリストと共に、被造物の管理に関わって歩むことです。それが、具体的にどのようなものかは、次のセミナーで詳しくお話しします。

もう一つは、このすばらしい被造物管理のメッセージを、他のキリスト者にお伝えすることです。あなたや私が、このメッセージを必要としたように、他のキリスト者もまた、同じなのですから。